佐高ミュージアムOriginal No.9(1990)

すっかんぽ

1991年1月号

ケサランパサランを探して。

ケサパサ1号
直径約4cm
(ほぼ実物大)

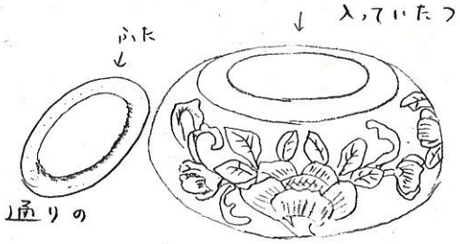
序章「何がなんだか、さっぱりわからん」

あれは、去年の10月ごろだったろうか。日よう日の昼ごろ、家でそうじをしていると、突然、体育のS先生から電話があった。「突然ですけど、ケサランパサランって本当にいるんですか？」どうやら、S先生の友人がクイズ番組に出ていて、そういう問題がでていたらしい。ちょうど、5月か6月の新聞のコラムで幸せを呼ぶ不思議なものとして、ケサランパサランが紹介されていたのを思い出し、自信を持って「あー、そんなものは、この世に存在しないよ」と断言してしまった。そう言った手前、その新聞記事をさがしだして、ほれ、この通り！と、エバってやりたい衝動にかられ、いっしょうけんめい探しはじめた。ところが、図書館でそのころの新聞を隅から隅まで、何度も探したが、どうしてもみつからない。そんな生活をひと月もくり返しているうち、だんだんと、ケサランパサランを、この目でみてみたい。そうしないと、とても、幸せになれそうにないような気がしてきた。そこで、さらに本気になって友人や市立図書館にたのんで探してもらうことにした。1月25日、最初の情報が友人から送られてきた。何と、それは、少女マンガで、ケサランパサランが"時間を食べる妖精で、食べた分だけ、その人を幸せにする"という内容であった。(どうも、ちょっとちがうんじゃないかな と思ったが……。)

第2章「野望への道のり」

そして、1月30日、市立図書館から「ケサランパサラン日記」というのがみつかりました。という連絡が入った。なんだか、名前がよくて、これも少女マンガに毛がはえたくらいのものだろうと、あまり期待はしていなかったが、パラパラとめくってみると、びっくり仰天。何と、ケサランパサランの成長記録や所有者名簿までのっているではないの！とうとう、探していたものに、めぐりあった。ケサランパサランの実物をみるという野望に一歩近づいたというよろこびを思わずかみしめてしまったのである。

ところで著者の西さんという方は、千葉市在住で、大学時代、下宿していた所から、そんなに離れていないことがわかった。ええい、めんどうだ、この西さんに直接あって、実物をみせてもらおうじゃないの、と、話は一気にすすみ、来週の火よう日、つまり2月5日の午後、西さん宅へおじゃますることとなった。そして、授業終了後、高速道路をとばし、3時間後に、ドアのチャイムを鳴らしたのである。



第3章「ケサランパサラン」

出てきた西さんは、私が想像していた通りの人だった。本に顔写真がのっていたので、顔がにているのは、あたりまえだが、文体からにじみでるふんい気が、本人からも漂っているのにびっくりした。西さんは、労をねぎらってくれた後、ケサランパサランの語源から説明してくれた。それによると、ケサランとパサランは、両方とも「まわる、渦をまく、丸いもの」といった意味を持っており、最初にみつけた人が、"何だかしらないが、もぞもぞしている、丸いもの"として、ケサラン、パサランと名ってたらしい。ところが、それが何者かまったくわからなかったので、そのうち「何がなんだか、さっぱりわからん」ものを、ケサランパサランというようになったらしい。(宮城県あたりの方言)

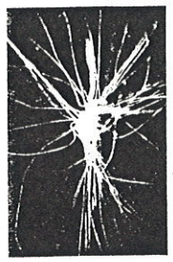
(用例)「あすこにある、あの光ってるものはなんだんべ」
「さー、なんだんべな、ケサランパサラン」
= 何がなんだか、さっぱりわがんね。

さしずめ こんなふうに 使っていたのでは ないかと思う。
そして いよいよ 本物の ケサランパサランが 入っている 木彫りの つぼが 登場してきた。 何となく うやうやしく ふたが あけられるのかと思って みていたら、西さんは、まるで ナベのふたをとるような、気前よくあけてくれた。
中には 白い もじゃもじゃした 固まりが みえかくれしており、どうやら これぞ 西さんが 最初に みつけた ケサランパサラン 1号 (略して ケサパサ1号と 呼んでいる) ということらしい。直径にして 4cm は あるだろうか。元気がいいと その 触手のような 毛を ふりまわしているのだそうだが、前に テレビの取材で カメラ用の 強いライトを あびてから、どうも元気がないらしい。 おしろいを エサとして 成長するのだが、この時は、おしろいを 近づけても 反応はなかった。
このケサパサ1号は 今から 10年以上も前に 庭に、飛んできたものを つかまえたのであるが、3ケ月に1回の 割で スプーン一杯の おしろいをやると、年に 1ミリくらい づつ 成長するらしい。 確かに 最初の大きさと 比べると かなり 大きくなっているようだ。

ところで、ケサランパサランは、10年程前に 大きな 話題に なったことがあり、全国で、その所有者が 名のりを あげている。 その中の1人 宮城県小牛田町の寺の住職、佐々木友義さんは、こんなふうに 語っている。
「大正7年の夏、先代が 本堂の 縁先で 涼んでいると、タンポポのように、白く ふわふわしたしのが 二個 飛んできた。 これは、ケサランだと 直感したらしい。 昔から おしろいの 粉を 食べると 聞いていたので、粉を 箱に入れて タンスの奥に しまい込んだんですな。 49年に 箱をあけると 13個にふえ、粉を 補充したら 今は 15個になった。 直径は 2~5cm で 大きくなったものもある。 白く丸い 綿状の 姿は タンポポや アザミに 似ているが よくみると 違う。 生きているから 生物に 決まっているんですが…」
はたして、こんなことって 本当にあるんか? 教科書等も 書いている 太田次郎 お茶の水大 教授は、このことについては 否定的である。
「おしろいを 食べる? それはないでしょう。 生物学的に 考え もし 本当だったら 大変だ。 学問上の 常識でいえば 水のない所で 生きのびる 生物はいない。」 まさに、out of 眼中 といったところだ。
しかし、そうすると "ケサランパサラン日記" 中の 成長の記録は、どう 解釈すればいいのだろうか。

③ 扇形に先がひらき少し太くなった。最長管 1.2㎜。

④ 中央の白いかたまりは、おしろい。扇状の先端がくずれ、不規則に四方に開きはじめた。


⑧ 次第に生えそろってきた管。

⑩ 管の長さも徐々にそろってきた。管の太さも増してくる。が、枝毛は肉眼ではハッキリしない。12㎜。

⑪ きれいに放射状にのびた管。少年少女期?のケサランである。枝毛が生えそろい、大人ケサランに成長するのは10年以上かかると思われる。

現在、西さんは、ある人(名前は明かさなかった)との 協同研究で、なぜ おしろいを 食べて 成長できるのかを 調べている。 あと 2、3年したら すべてを 発表したい、と 話していた。 そして、サービスで その内容を ちょっと だけ 教えてくれた。 それによると、例えば アザミの 冠毛(わた毛)その ものでも、土中の ある種の バクテリアが 入り込むと、ケサラン化し、成長、増殖が可能となるらしい。 なるほど と思った。

終章 「幸せを呼ぶ(かもしれない)ケサパサ君」

その夜、まだ大学に残っている同級生2人と 久しぶりに のんでしまった。
「どう思う?」という私の問いに、「バクテリアだったら 説明できるかもな」と 好意的だった。 「夢があるよな…」 確かに 幸せを もたらす という、いい伝え通り、西さんは、幸せそうだった。 私にも ケサパサ をわけてくださり、「これで 幸せを ひとりじめじゃ、ふっふっふ」と よろこんでいたのもつかのま、大事な ケサパサを 千葉に 置いてきて しまった。それから 悪夢のように 悪いことが つづけて おこり、"ケサパサさえ もっていたら"と、思うこと しきりである。
今回の取材を 通しても、ケサパサの正体は、まさに ケサランパサラン…。
しかし、こんな生物が いてもいいなと 思った。

PS. 西さんより 「ケサランパサラン日記」5冊いただきました。よみたい人には かしますよ。